

をしていると教務から人事、経理や施設のことまで全学の様子がわかって、国立の大学というのはこんな具合に運営されているのだということがわかります。文科省と大学の関係もよくわかり、いい勉強になりました。

北陸先端大は学部がない上に相当な田舎にあるので、現代の学生達はあまり来たがりません。私にとっては、白山の麓で熊が出るほど自然に恵まれ、都会の喧噪から隔離された環境は学問追求に理想的だと思うのですが、ある経営協議員の意見では“学生には赤提灯と女子大が近くにないとダメだ”ということです。（その点東北大は非常に恵まれていますね！）という次第で学長になって以来いい学生を誘導することに考えられるあらゆる手法を使いました。地元との連携も大学にとって大切なことで、これにもエネルギーを注ぎました。事務局の効率

化や教員や学生からの要求に対する対応の改善も力を入れたことの一つです。また全教員を激励して科研費を始めとする外部研究資金の獲得にも努力すると同時に、人事評価もかなりシステムティックに（厳しく？）しました。

私としてはこの大学にとって必要な改革を進めてよかったですと思っているのですが、このような変革は教職員の間であまりポピュラーとは言えません。それもあってか、再任の為の意向投票では大差で完敗しました。実行したことは必要なことばかりでしたが、やり方が皆さんの気に入らなかったのだらうと思っています。まあ不徳の致すところというわけです。このような次第で、来年4月からは今までより頻繁に仙台に現れるでしょうか、どうぞよろしく。



学内の近況

電気・情報系の近況

会員の皆様には、ますますご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。人事異動などを含めて、電気・情報系学科の最近の状況をご紹介します。

昨年の記事においてもお知らせしたことですが、平成19年度から学科名を「電気情報・物理工学科」から「情報知能システム総合学科」と変更いたしました。また、従来の電気工学科、通信工学科、電子工学科、情報工学科、応用物理学科に対応したコースとして、大学科に電気エネルギーシステム、情報通信システム、情報エレクトロニクス、情報工学、応用物理の5つのコースを設置してきましたが、平成19年度からはエネルギーインテリジェンス、コミュニケーションネットワーク、情報ナノエレクトロニクス、コンピュータサイエンス、知能コンピューティング、メディカルバイオエレクトロニクス、ナノサイエンスの7コースを設けて学部教育に当たっております。

工学研究科・工学部の運営に関しては、昨年4月から電子工学専攻の内田龍男教授が工学研究科長・工学部長として、今年4月に教育研究評議員に選出された電気・通信工学専攻の澤谷邦男教授と共にその運営にご尽力頂いております。また、情報科学研究科では副研究科長としてシステム情報科学専攻の西関隆夫教授（教育研究評議員兼務、平成17年4月より）が運営に携わっていらっしゃいます。

平成19年3月、電気・情報系から220名の学部学生が卒業し、また、大学院工学研究科及び情報科学研究科からは、博士

前期課程215名、博士後期課程68名が修了しました。平成19年4月には新たに学部学生（3年次）245名（編入学生10名を含む）、大学院前期課程206名、および後期課程34名の新入生を迎えました。このなかには社会人入学制度による社会人大学院学生12名（前期課程0名、後期課程12名）が含まれています。以上のほかに、10月に若干の新入生（10月入学）が加わりました。

次に、この一年間の主な人事異動を紹介致します。

工学研究科では、平成19年1月、電気・通信工学専攻音波物理工学分野に梅村晋一郎教授（前京都大学医学部教授）が着任されました。平成18年10月には電子工学専攻知的電子回路工学分野 阿部正英講師が助教授に、平成19年1月には電子工学専攻電子制御工学講座 長谷川英之講師が助教授に、平成19年4月には電子工学専攻電子物理工学分野 齋藤 伸助手が准教授に、平成19年8月には電気・通信工学専攻パワーエレクトロニクス分野 中村健二助教が准教授にそれぞれ昇任されました。また、電気・通信工学専攻に寄附講座（先端応用量子光学寄附講座）が設置され、客員教授に伊藤弘昌教授（電気通信研究所所長）が、客員准教授に原 武文准教授（(株)光電製作所チームリーダー）が着任されました。電気・情報系に教育広報企画室が設置され、特任教授と

